

研究業績等に関する事項

著書, 学術論文等の名称	単著, 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所, 発表雑誌等 又は 発表学会等の名称	概 要
(著書(欧文))				
(著書(和文))				
(学術論文(欧文))				
(学術論文(和文)) 1. 母親が自閉スペクトラム症をもつ子どもの就学前に体験した子育てのプロセス (修士論文)	単著	2018年2月	獨協医科大学看護学研究科	<p>就学前に支援を受けた自閉スペクトラム症児の母親の子育ての体験を明らかにすることを目的に、8名の母親への半構造化インタビューを行った。インタビュー内容を逐語録化し、修正版グラウンデッドセオリーアプローチを用いて分析した。</p> <p>その結果、母親は可視化されないあいまいな自閉スペクトラム症の障害特性と周囲の人々との相互作用の中で葛藤しながらも障害児の母親として子育てに取り組む体験をしていることが明らかになった。</p> <p>支援者は、子どもの発達段階や母親の気持ちの揺れ動きを理解し、他職種との連携のもと継続した支援を行うことが示唆された。</p>
2. 健康成人を対象としたリフレクソロジーによるリラックス反応の評価	共著	2002年9月	第33回日本看護学会 論文集 看護総合 P218~220	<p>健康な女性10名を対象に相補・代替の1つであるリフレクソロジーの効果について客観的な測定を行い、心理的・生理的側面から明らかにすることを試みた。</p> <p>データ収集を担当した。</p> <p>共著者：駿河恵理子、峰岸由紀子、横山和世、菅野こずえ</p>
(紀要論文)				
(辞書・翻訳書等)				
(報告書・会報等)				
(国際学会発表)				

<p>(国内学会発表)</p> <p>1. 母親が自閉スペクトラム症をもつ子どもの就学前に体験した子育てのプロセス</p>	<p>共著</p>	<p>2020年6月</p>	<p>第68回日本小児保健協会学術集会</p>	<p>就学前に支援を受けた自閉スペクトラム症児の母親の子育ての体験を明らかにすることを目的に、8名の母親への半構造化インタビューを行った。インタビュー内容を逐語録化し、修正版グラウンデッドセオリーアプローチを用いて分析した。</p> <p>その結果、母親は可視化されないあいまいな自閉スペクトラム症の障害特性と周囲の人々との相互作用の中で葛藤しながらも障害児の母親として子育てに取り組む体験をしていることが明らかになった。</p> <p>支援者は、子どもの発達段階や母親の気持ちの揺れ動きを理解し、他職種との連携のもと継続した支援を行うことが示唆された。</p> <p>横山和世（発表者）、井上ひとみ</p>
<p>2. 発達障害支援における5歳児発達相談の有用性—アセスメントツールの開発と活用—の効果—</p>	<p>共著</p>	<p>2020年6月</p>	<p>第68回日本小児保健協会学術集会</p>	<p>5歳児発達相談を実施するにあたり、独自に作成した調査票、気づきのシートおよび統一課題のアセスメントツールを用いたA市における事業の取り組み例について報告した。アセスメントツールの導入により、客観的なアセスメントの、他職種との連携および情報共有、保護者の気づきを促す結果説明が可能となった。その結果、アセスメントツールの活用は、発達障害児の早期発見・早期支援、保護者への支援につながっていると考えられる。</p> <p>横山和世（発表者）、柳川悦子、大島美絵、山崎友理、並木千絵</p>
<p>3. 発達障害支援における5歳児発達相談の有用性（2）—特別支援学校センター的機能充実事業の視点から—</p>	<p>共著</p>	<p>令和2年6月</p>	<p>第68回日本小児保健協会学術集会</p>	<p>特別支援学校では、特別支援学校センター的機能充実事業として、地域の特別な教育的支援が必要な幼児とその保護者への支援を行っている。その中で、A市における園訪問等と実施後の相談・支援の実際について報告した。</p> <p>実施の成果として、保健・医療・教育・福祉等の連携がとりやすくなっている。園訪問で実際の現場から個別相談につながり、よりよい支援を行うことができていると思われる。</p> <p>共同研究につき本人担当分抽出不可能。</p> <p>柳川悦子（発表者）、大島美枝、横山和世、山崎友理、並木千絵</p>

<p>4. 発達障害支援における5歳児発達相談の有用性（3）—協調運動のスクリーニングと就学支援：作業療法士の立場から—</p>	<p>共著</p>	<p>2020年6月</p>	<p>第68回日本小児保健協会学術集会</p>	<p>個別及びグループ相談における効果的な評価と協調運動の捉え方を作業療法の視点で助言した取り組みについて成果を報告した。      早期に保護者や児に合った家庭や園での関わり方を助言し、保護者が協調運動の課題に気づくことは就学支援の一助となる。気づきには、統一課題の活用や心理面にも配慮したグループ相談が有効であった。      共同研究につき本人担当分抽出不可能。      柳川悦子（発表者）、山崎友理、大島美枝、横山和世、並木千絵</p>
<p>5. 発達障害支援における5歳児発達相談の有用性（4）—心理相談の役割—</p>	<p>共著</p>	<p>2020年6月</p>	<p>第68回日本小児保健協会学術集会</p>	<p>臨床発達心理士が子どもの行動特性に関する保護者の悩みに寄り添い対応方法を助言し、その後も園との連携を図り、保護者の支援を継続している。今回、新たに試みた保護者同士のグループワークについて報告する。      実施の結果、保護者の心理状態や子どもへの対応の改善により、子どもの心理状態や行動の改善につながることが確認された。      共同研究につき本人担当分抽出不可能。      柳川悦子（発表者）、並木千絵、大島美枝、山崎友理、横山和世</p>
<p>6. 発達障害支援における5歳児発達相談の有用性（5）—就学への円滑な流れ</p>	<p>共著</p>	<p>2020年6月</p>	<p>第68回日本小児保健協会学術集会</p>	<p>発達障害児の早期発見、早期療育が進み就学への円滑な流れにつながったA市における5歳児発達相談の取り組みを報告した。      5歳児発達相談でのスクリーニングによりその後1年の支援や療育が成果を上げ、さらに就学への円滑な移行により学校生活での混乱が少なくなっている。      共同研究につき本人担当分抽出不可能。      柳川悦子（発表者）、並木千絵、大島美枝、山崎友理、横山和世</p>

7. 地域包括ケア演習における看護学生の学びの経験	共著	2024年1月	第12回日本公衆衛生看護学会	地域包括ケア演習において学生が学んだ「地域包括ケアシステムにおける看護職の役割」は以下のとおりである。 ①地域と病院をつなぐ橋渡しとなること、②入院は「人生の通過点」という視点でアセスメントすること、③正しい正しくないではなく、その人にとっての最善を尽くすこと、④確かな知識と技術に立脚した専門性を身につけること、⑤医療ありきの思考から脱却すること、⑥地域と病院の看護職の連携が移行支援の要になること、⑦自分ができることは何かを常に模索することが明らかになった。以上の結果から、地域包括ケア演習は「地域でその人らしく健康に暮らすことを支える看護ができる人材」育成を目指す実感を伴った学びにつながったと考えられる。地域包括ケア演習を通して、以下の学修成果が得られ本学が目指す「地域でその人らしく健康に暮らすことを支える看護ができる人材」育成のため、変化する社会的背景、時代に求められる看護職の役割を意識し、地域と大学が協働して演習を作り上げていくことが今後必要であることが示唆された。 横山和世（発表者）、梅井尚美、井坂恵、会沢紀子、中川泉、板垣昭代
(演奏会・展覧会等)				
(招待講演・基調講演)				
(受賞(学術賞等))				

研 究 活 動 項 目

助成を受けた研究等の名称	代表, 分担等の別	種 類	採択年度	交付・受入元	交付・受入額	概 要
(科学研究費採択)						
(競争的研究助成費獲得(科研費除く))						
(共同研究・受託研究受入れ)						
(奨学・指定寄付金受入れ)						
(学内課題研究(共同研究))						
(学内課題研究(各個研究))						
(知的財産(特許・実用新案等))						